

環境税と環境教育	1
中津川「山吹沢の森」づくり	2
植林開始時の山吹沢の植生について	4
「森づくり」が目指すもの	6
内藤勝久 2004年8月6日埼玉県中央部森林組合講演	
和名倉の森づくりのこれから	10
グリーンベンチ工法 —水平面創造への挑戦	12
シリーズ 大滝村の林家を訪ねて	14
森づくり県内の動き	15
活動報告	16

和名倉 百年の森



環境税と環境教育

百年の森づくりの会 会長 内藤勝久



埼玉県が県独自の環境税の導入に向けて動き出した。環境日本一を掲げる上田知事は、今年度環境NPOプラザ（共同事務所）の開設、寄付基金の創設を行ったが、これに続くインフラ整備の第3弾である。検討委員会も一年前倒しで結論を出すという。議会内にも導入に向けた検討が始まっているようで心強い。満場一致で承認されることを期待したい。

百年の森づくりはまもなく満7歳を迎えるが、「水源の森は皆で守る」という考えはかなり定着したように思う。環境問題を考えるときまず最初に出てくるのがゴミ処理である。今すぐ対処しなければならぬ重要な問題であるが、植林と同列に議論されて植林はいつも後手にまわってきたように思う。長い年月のあとに成果が現れる植林は損な役回りである。しかしあるとき水が出なくなつてよくよく調べてみたら、水源の森の木がなくなつていたらどうなるか。それから木を植えてもすぐには間に合わない。大金を投じて木はすぐに大きくはならない。一方ゴミ問題はお金で解決ができる。たとえば無人島を購入して、最新のゴミ処理装置を設置し、補償が必要なら十分な手当てをすれば、それほど時間をかけなくとも解決は可能だ。逆にお金が

なければ時間をかけても解決はできない。時間でしか解決できないものとお金で解決できるものとを混同してはいけない。

日本は島国であると同時に山国である。山が荒れば、川も海も全滅。日本丸は沈没だ。森林は日本の国土の守護神、だから植林は国家最優先の事業といつても過言ではあるまい。かといってポランテアで森づくりはできない。それは山村の人々の仕事だ。しかし現在の林業は儲からない。過疎化が進むわけだ。山村の生活がいやだというのではない、生活ができないのだ。だから生活できるようにする。それが環境税。そうすれば山村も賑わいを増す。山が蘇る。川も海も豊かになる。水源の森づくりを山村だけに押し付けるのは、権利だけを主張して義務は果たさない現代の風潮と一致するが、それも限界があることに皆が気づき始めた。我々の活動も植林を通じて啓蒙活動にあることを思えば、「水源の森は皆で守る」という世論づくりに少しは貢献できたかなと思う。

2年前から次世代への夢の継承に力を入れた。埼玉県立浦和高校の同窓会が「浦和百年の森づくり」に取り組むことになつ

た。在校生を巻き込んだプロジェクトに発展するまでには少々時間がかかりそうなので、とりあえず総合教育の一環として取りあげてもらおうことになった。植林活動に参加した高校生はやがて大学に進学することになるが、そのとき植林の体験は進路を決める際の大きな手がかりになるに違いない。「人は木よりも早く育つ。人の教育が大切」とは畠山重篤氏（「森は海の恋人」活動を主宰。宮城県で牡蠣の養殖をしている）から教えていただいたことだが、春秋に富む高校生はその意味ではもつとも大切な年代だ。人生を考えるときにも何らかの参考になる。この浦高同窓会の動きに最も早く反応するのは自前の演習林を持つ秩父農工。つぎは私立高校が立ち上がるだろうか。旧制中学の流れを汲む熊谷高校、川越高校、春日部高校も黙つてはいられない。植林に参加すれば今まで見えなかったことが見えてくる。水源の森の素晴らしさや大切さ、山村の現状、森林の持つ多面的機能、森林文化など。

植林の経験は豊かな人生の大きなステップになると確信している。



5月22日、大滝村中津川の山吹沢県有林で、昨年ひきつづき植林作業が行われました。スギの伐採跡地に、少しずつ木々が育ちはじめています。今年から秩父カブスカウトの小学生や鳩ヶ谷八幡木中の科学部の中学生も加わり、楽しみながら森づくりを行いました。

大滝村
中津川・
山吹沢の森づくり

やまぶきさわ



中津川山吹沢の
植林に参加して

百年の森づくりの会 会員

松村 勝三

細い道が
ガタコトと
揺られて、
中津川山吹
沢入口まで
来た。見覚
えのある風
景に気づい
た。三十数
年前、両神



山に登り、八丁峠を越えて下山した道だと思いついた。

バスを降り、わずかな急斜面を登り、目的地に着いた。すでにボーイスカウトの子供たちが大勢来ていたのには感激した。

山での弁当はうまい。しかし、作業が気になり、自然と箸の運びが早くなる。数班に分かれて作業が始まった。ブナ、ミズナラ、山桜等の苗木を分けて、ここはブナ、この辺は山桜をと、リーダーの指示に従って植栽が進んでいく。雑草の根っこだけの大地にしっかりと植えた。支柱も立てた。雑草に負けないよう

7.24 山吹沢下刈り



7月24日59名が参加して下刈り作業を行いました。作業班を3つ分け、1班は昨年植林した0.8ヘクタールの下刈り作業、子供たちを中心にした2班は、3箇所に設けられた植生調査区の観察と整備、3班は今年5月に植林作業をおこなった0.4ヘクタールのエリアで下刈り作業を行いました。2年目をむかえる植林地では、オオバアサガラやイタヤカエデ、アオギリ、オヒョウなどの幼樹がみられるようになりました。それらの幼樹を切らないように残しながら、植栽された苗木の根回りの刈り払いを行いました。



7.25 大陽寺下刈り



大滝村大血川の大陽寺の下刈り作業は、3年目をむかえます。大陽寺の参道に沿う急斜地にコナラやヤマザクラなどの広葉樹300本が植林されています。背丈を越える下草刈りに前日にひきつづき、鳩ヶ谷八幡木中学校の中学生も取り組みました。その時の様子が学校のホームページに掲載されています。引率された守谷先生は、「炎天下の中、急斜面で大きな鎌を振り回し、刈ることの大変さを学ぶ事が出来ました。…苗木より勢いのある草やタラの木、つる性の植物など光を求めて強い植物だけが生き延びる世界を目の当たりにしました。植えた苗木を見つけながら周りを丁寧に刈り取って行く作業の大切さが分かりました」と感想をのべられています。



頑張れと折りながら、ピンクのリボンをつける。十数年後にはお花見ができるね、などと話し合いながらの作業だった。

その夜、中津川キャンプ場で、苗木づくりの説明会が開かれた。ドングリの一年もの、2年もの、3年もの鉢植えの苗木を見せていただいた。その成長の早さと、しっかりとした苗木を見た時、思わず家内と目を見合わせた。実は私達も3年前の東大演習林見学の時、ドングリを拾って持ち帰り、庭に蒔きました。うまく発芽し、育った苗木が6本ほどあります。いつか、この苗木を中津の山に持って行き、植えてあげたいね、と目頃話し合いながら、今回の植林作業にも参加したのです。苗木づくりの説明会は、ほんとうに好機でした。来年の夢が広がり、参加が楽しくなります。先生と一緒に参加した科学部の中学生さんと楽しいおしゃべりができました。バーベキュー、思い出に残る夕べでした。

私の孫も3歳になり、あと3年もすれば、私達の植えた木を見せに連れて来て、植林の大切さ、成長を見守るたのしさ、山のすばらしさを教えてあげたいと思いました。

植林開始時の山吹沢の植生について

百年の森づくりの会 常務理事 市川 嘉一

第1区 オオバアサガラ低木林

標高 1050m

傾斜方向 S10° W

傾斜角度 15°

測定者 愛川・尾形・平・石川

・斎藤

記入者 朝尾

枠 5m × 5m

80年生のスギ植林を伐採後2年経過、すでに被度70%を越えている。



階層	優占種	樹高	植被率
Ap	なし		
As	なし		
F1	オオバアサガラ	3m	40%
F2	コアカソ	0.3m	40%
H	タケニグサ	0.3m	100%
M	なし		

階層	種名	優先度
F1	オオバアサガラ	3
F1	エビガライチゴ	2
F1	フジウツギ	1
F1	タラノキ	+
F1	チドリノキ	+
F1	ヤマザクラ (植栽)	+
F2	コアカソ	2
F2	エビガライチゴ	1
F2	タラノキ	1
F2	ブナ (植栽)	+
F2	ミズナラ (植栽)	+
F2	アラゲアオダモ	+
F2	イロハモミジ	+
F2	イワガラミ	+
F2	キフシ	+
F2	クマイチゴ	+
F2	コミネカエデ	+
F2	ツルウメモドキ	+
F2	ナガバノコウヤボウキ	+
F2	ミヤマニガイチゴ	+
H	タケニグサ	1
H	ツルニガクサ	1
H	アオスゲsp1.	+
H	イネ科sp	+
H	アオミズ	+
H	アカネ	+
H	イヌワラビ	+
H	オオバヤエムグラ	+
H	オオルリソウ	+
H	カエデコロ	+
H	カタバミ	+
H	キヨタキシダ	+
H	トモエソウ	+
H	ナベナ	+
H	ハンショウヅル	+
H	ヒカゲスゲsp.	+
H	ヒメムカシヨモギ	+

階層	種名	優先度
H	フシグロセンノウ	+
H	ミズ	+
H	ミヤマワラビ	+
H	ヤハズソウ	+
H	ヤブレガサ	+
H	ヤマカシュウ	+
H	ヨモギ	+
C	ヤマホロシ	+
C	テイカカズラ	+

【調査の方法】

林分の調査では階層を高木層 (Ap)、垂高木層 (As)、第1低木層 (F1)、第2低木層 (F2)、草本層 (H)、つる植物 (C) およびコケ層 (M) に分けて調査した。目算で各階層ごとに被度を求め、それをもとに Ap・As・F1 の階層は、胸高断面積により各種ごとに被度を算出し、他の階層はそれぞれ目算によった。このようにして求めた被度をもとに種別の優先度を求めた。

低木林の調査では、目算で各層ごとに被度を求め、それをもとに各種別の優先度を算出した。

調査数が不十分なので詳しい解析は行わず、各層ごとの種組成と優先度のみを示した。

2003年7月30日に埼玉県高等学校生物研究会が、秩父中津川地区で夏の現地調査会を行い、山吹沢県有林の植生調査を行いました。生物研究会のご好意で『埼玉生物44号』より、その結果をお借りし、第1区の階層などを改変して載せます。

第1区 (緩傾斜地)、第3区 (沢沿い) の陽樹を中心とする植生が、遷移初期の典型的な植生と考えられます。

1年後の2004年7月24日に、秩父カブスカウトや鳩ヶ谷八幡木中学校の科学部の子ども達と観察した時、第1区は右横に作業道が作られたため左側に2m移動しましたが、第1区と第4区の植生は、おおむね前年度と同じでした。第3区はハチの巣があったため十分な観察ができませんでした。前年に見られた絶滅危惧種のナベナはすべて枯れ、オオバアサガラの低木林となっていました。第2区は県植栽域に入ったため、この報告からは割愛しました。

植林開始時点の山吹沢の植生調査は、今後の森づくりのための貴重な基礎資料になるものです。





第4区 サワグルミ林

標高 1040m
 調査地 東経138度47分08.6秒
 北緯 36度01分05.9秒
 傾斜方向 S74° W
 傾斜角度 26°
 測定者 木口・三上・田中・市川・山下
 記入者 牧野
 枠 10m×10m



この地域に残る自然植生に近い森林と考えられる。

第3区 ナベナ-オオバアサガラ低木林

標高 1035m
 調査地 東経138度47分08.6秒
 北緯 36度01分05.9秒
 傾斜方向 S56° W
 傾斜角度 18.2°
 測定者 木口・三上・田中・市川・山下
 記入者 牧野
 枠 10m×10m



階層	優占種	樹高	植被率
Ap	サワグルミ	20m	95%
As	イタヤカエデ	10m	90%
F1	イタヤカエデ	5m	65%
F2	シオジ	1m	6%
H	タケニグサ		1%
M	なし		

階層	優占種	樹高	植被率
Ap	なし		
As	なし		
F1	なし		
F2	オオバアサガラ	2m	80%
H	ナベナ	0.7m	100%
M	なし		

階層	種名	優先度
Ap	サワグルミ	4
Ap	オヒョウ	2
Ap	オオバアサガラ	2
As	イタヤカエデ	4
As	オヒョウ	2
As	シオジ	1
F1	イタヤカエデ	3
F1	サワシバ	2
F1	チドリノキ	2
F1	ヒナウチワカエデ	1
F2	シオジ	1
F2	チドリノキ	1
F2	コバノトネリコ	+
F2	ミズナラ	+
F2	ムラサキシキブ	+
F2	ケヤキ	+
F2	サワシバ	+
F2	オヒョウ	+

階層	種名	優先度
H	ミヤマイラクサ	+
H	ヒナスミレ	+
H	イチヤクソウ	+
H	フジスミレ	+
C	サルナシ	3
C	イワガラミ	1
C	ツルウメモドキ	+
C	ツルマサキチドリノキ	+

階層	種名	優先度
F2	オオバアサガラ	3
F2	クマイチゴ	2
F2	サワグルミ	1
F2	エビガライチゴ	1
F2	タラノキ	1
F2	フジウツギ	1
F2	ヌルデ	1
F2	カツラ	1
F2	サンショウ	1
F2	チドリノキ	1
F2	ムラサキシキブ	1
F2	ヤマウルシ	+
F2	ヤマグワ	+
F2	イタヤカエデ	+
F2	アワブキ	+
F2	ムクノキ	+
F2	コミネカエデ	+
F2	アサダ	+
F2	イヌザクラ	+
F2	モミジイチゴ	+
F2	ヤマブキ	1
F2	コシアブラ	1
F2	ミズナラ	+
F2	オヒョウ	+
F2	リョウブ	+
F2	フサザクラ	+
F2	クサギ	+
H	ナベナ	3
H	タケニグサ	2
H	ホソエノアザミ	1
H	マネキグサ	1
H	イトスゲ	1
H	コアカソ	1
H	ツルニガクサ	1
H	ヒゴクサ	1
H	ムカゴイラクサ	1
H	シロヨメナ	1

階層	種名	優先度
H	ヨツバヒヨドリ	1
H	コシオガマ	1
H	ヨモギ	1
H	イヌワラビ	1
H	ミツモトソウ	1
H	ウスゲタマブキ	1
H	ヤマホタルブクロ	+
H	ナギナタコウジュ	+
H	ヤエムグラ	+
H	ヤクシソウ	+
H	エイザンスミレ	+
H	オトコエシ	+
H	カワミドリ	+
H	ミヤマイラクサ	+
H	タニタデ	+
H	ミヤマヤブタバコ	+
H	ウマノミツバ	+
H	フタリシズカ	+
H	ダイコンソウ	+
H	ホウチャクソウ	+
H	キツリフ	+
H	ヒメジョオン	+
C	ヤブヘビイチゴ	1
C	アカネ	+
C	テイカカズラ	+
C	ヤブマメ	+
C	ツルマサキ	+
C	イワガラミ	+
C	コボタンヅル	+
C	サルナシ	+
C	ツルウメモドキ	+

■7.24下刈り時の子どもたちによる植生観察



■オオバアサガラ



「森づくり」が目指すもの

内藤 勝久

2004年8月6日 於・寄居町

埼玉県中央部森林組合 講演

ただいまご紹介いただきました内藤でございます。本日はこのよ
うな機会を与えていただきまし
て、林業のプロの皆さんに素人が
進めております植林ボランティア
活動の一端をご披露できますと
、誠にありがたかつ光栄に
思っています。

1. 埼大ワングル創部40周年 記念

私たちの百年の森づくりは、埼
玉大学ワンダーフォーゲル部創部
40周年を記念して始めた植林ボ
ランティア活動です。ブナやミズ
ナラなどの落葉広葉樹を水源の森
に植えて百年がかりで緑のダムを
つくるというものです。

今からちょうど10年前のこと
になります。私は埼玉大学ワン
ダーフォーゲル部OB会長に就任
しました。54歳のときでした。
2年後に創部40周年記念行事が
控えていました。記念事業をしつ
かりやり遂げることが私に与えら
れた当面の一番の課題でした。
せっかく与えられたチャンスでし
たので何とかして自分らしいアイ
ディアを見つけないかと考えまし
た。しかしなかなかいいアイディ
アは浮かぶものではありません。
あつという間に1年がたってしま
いました。悩みに悩み一生懸命考
えていました。あるときふと「ブ
ナの森をつくる」と思ったんで
す。芽吹きころの白と新緑のコ
ントラスト、5月の連休明けに
登った岩木山のブナが奏でる旋律

のない音楽、45年前の晩秋の北
八ヶ岳の紺碧の空に広がる紅葉の
ブナなど懐かしい思い出が次々に
湧いてきました。

それから周到な準備が始まりま
した。まず女房に話してみまし
た。「亭主のロマンは女房の不
満」といわれるように結婚してこ
の方、女房は最大の抵抗勢力と
なっていました。埼大のワングル
OGでもありました。それが「い
いじゃないですか。私もいきます
よ」といとも簡単に賛成してくれ
たんです。強力な同志が現れたこ
とになります。しかしいくら女房
がワングルOGだからといって、
記念事業を夫婦二人で決めること
などできませんし、安心できません。
そこで高校時代の2人の友人
に相談することにしました。2人
とも東大に進んだ秀才ですが、秀
才というのは情にながされること
のないクールな人が多いので、ど
んな反応があるか楽しみでした。
いっぱいやりながらブナの森の構
想を話すと、二人とも即座に「そ
れはすばらしい考えだ。俺もやる
よ」というではありませんか。同

志は3人となりました。でもまだ
不安は残ります。若者がついてき
てくれるかということです。たま
たまワングルの学生たちが毎年秋
に高尾山や陣馬山で清掃登山をし
ていましたので、2回ほど参加し
てこれはいけると思ったんです。
というのは普段はどろつとしてい
る学生たちがごみを見つけたら急
な斜面でも駆け下りて拾ってくる
んです。そのときの目は輝いてい
るのです。私よりも30歳も若い
学生も賛成派であることを確信し
ました。つぎに植林するためには
技術や知識を習得する必要がある
ので、埼玉県の森林サポーターク
ラブの第1回の研修に参加して植
栽、下草刈り、間伐など学びまし
た。準備は万端整い、このプロ
ジェクトは必ず成功するだろうと
確信しました。しかし活動が広が
れば広がるほど初期の目的が薄れ
る心配がありました。今日は原爆
記念日ですが、原水禁運動も元は
主婦の発想と聞いたことがあります。
世界で初の原爆被爆国。なぜ
もっとしっかりしたメッセージを
国民一体となって全世界に発信で
きなないのでしょうか。毎年この時



節になるとそんなことを考えていましたので、コンセプトがいかに大切か痛感していました。そこでコンセプトづくりに取り掛かりました。「山への恩返し」という言葉は比較的簡単に浮かびましたがきわめて漠然としています。どこ

かで大成功を収めました。その後の役員会で最も若い役員から「ごみ拾いは夢がない、会長が提唱しているブナの森をつくらうではないですか」との提案がありました。即座に私はその提案を取り上げ次回からブナの木を植えることにしたのです。

2. 奇特の人と言われて

登山の対象ですが、川の源流でもありません。そうだ「水を育む」という修飾語をつけなければいいではないか。これなら水源の山、秩父ということになります。準備完了です。私の決意は確固たるものにな

りていました。しかし役員会にはかると反応は鈍いんです。無理もありません。私がブナの森づくりに到達した過程もブナにまつわる思い出もすぐに理解することは不可能です。説得にしばらく時間をかけることにしました。お祭りですからできるだけ多くの人が参加するのが理想ですので、役員の意見を聞いてみることにしました。

「学生がやっているゴミ拾いがいい」というので、第1回の活動は雲取山の清掃登山と決まりました。ワンゲルの新旧部長、OB 13名、学生26名計41名の参加で無事に終了しました。活動を始めて7年がたちました。昨年の11月には1200万円の工費と700名を超え、この4月29日の緑の日には森林・林業の振興に功績があつたとして、埼玉県知事表彰をいただきました。5月に行われた今年の総会の後の懇親会で、私の周到な準備をご存じない小室所長は私の友人に「これほど長く続くとは思わなかった」と本音を漏らされたそうです。

は「森は海の恋人」運動に16年前から取り組み小中学校の教材にも取り上げられています。不思議なことに関東にはありません。漁師さんにとって魚介類が獲れなくなれば死活問題です。誰でもその原因を調べ、対策を講じます。ところが先ほどご紹介がありましたように私は一介の保険屋です。木を植えても保険の取り扱いが増えるわけではありません。また将来政治家になるつもりもありません。

3. わが心の源流

話ですが「ご奇特な人がいるものだ」と思ったそうです。ご奇特という言葉には尊敬というよりやあきれたという意味合いが強いように思います。素人に森なぞできるわけがない、すぐにやめるだろうが地元埼玉大学のワンゲルOB

会という素性も明らかだし、目的も創部40周年記念事業とはつきりしているの少し手伝ってみるかとお考えになったのかもしれない。大滝村との交渉もおかげさ

ところで本日の講演にあたってなぜ私がこのようなご奇特なことをはじめたのか考えてみました。漁業関係者が山に植林する話は沢山あります。私が知っているだけでも全国に32、厚岸の漁師の主婦、襟裳岬の人々（森進一の「襟裳岬」で襟裳の春は何もない春です、という歌詞に地元の関係者は怒っているそうです。今では海が蘇り立派な昆布が取れるからで

なぜか。私は心の源流を辿ってみました。すると3つほど思い当たるフシが見つかりました。まずはじめは日本百名山に挑戦し、全国に登っていたということ。私は高度成長期に社会人となり40歳のときに日本百名山を目指すことにしました。北は利尻島の利尻岳、南は屋久島の宮之浦岳と百名山のあるところどこでも行きました。悲しいことに全国どこでも乱開発が進み、山は荒廃し、水も安心して飲めなくなりました。学生のころはほとんどの川の水はきれいで顔をつけてがぶがぶ

飲むことができずました。そのうち水が商品。驚きました。また昼なお暗く鳥の声ひとつしないうち放置された杉や檜の林を通ることもしばしばありました。鳥がいけないというよりは餌となる虫がいけない、虫が住める環境にない、健全な森が育っていないということになります。本で読んだ知識ですが間伐を必要とする立木が全国に7億5000万本あるそうです。だんだん荒れてゆく山河をみて私の体に何とかしなければというマグマが溜まっていたのです。次に伊庭貞剛という偉大なリーダーを知ったことです。私のプロフィールでもお分かりのように埼玉大学を卒業後住友海上火災保険という損害保険会社に入社しました。研修でよく研修所に行くとそこには必ず住友の歴代のリーダーの伝記が置いてありました。その中で近代住友の基礎を築いた伊庭貞剛は、私の心を捉えたリーダーの中のリーダーでした。四国の別子銅山で発生した日本初の公害問題を解決するため、すべての施設を瀬戸内海の無人島に移し、その跡に事業として植林をしたのです。「別子の山々

を元の青々とした山に戻す」ことにしたのです。先日なくなった作家の中野孝次は「伊庭貞剛は多くの人材を育て、住友の根幹をつくった人であったが、それらよりも植林事業をもって己が生涯の誇りに足る事業としたのである」と絶賛しています。総工費は別子銅山の年間の収入に匹敵する金額だったそうです。

ました。そのときふと私は年をとったら山で生活したいといったのです。「山か、それはいいな」と賛同してくれたのです。ただそれだけのことですが、妙に心に残ったのです。

4. 目的は山村に賑わいを取り戻すこと

るまでいろいろな百年の森づくりが始まれば、埼玉県は一躍環境保全の先進県として脚光を浴びるに違いありません。もちろん県産材の優先的使用、廃材の活用、景観を生かしたエコツアーなど並行して取り組むべき課題は沢山ありますが大きな流れができれば自ずと解決する問題です。

一昨年私は念願の別子銅山に登ってきました。現在進めている百年の森の完成を見ることは不可能ですが、百年前に植えた木を見ることはできます。一部にはまだ焼け爛れた山肌が残っていました。青々とした別子の山々が蘇っているのを見て、伊庭貞剛の英断に深い感銘を受けると同時に、これからの活動に大きな自信を持つことができました。三つ目は義父の賛同です。義父は浄土真宗の坊さんでした。金儲けには一切興味がなくただひたすら親鸞を生きることに関心した人でした。私が長野支店長をしていたとき、親鸞が近くに逗留したという須坂の奥の七味温泉に案内したことがあり

ところで百年の森づくりといっています。年々数回のボランティアで森づくりができるほど生易しいものでないことは重々承知しております。われわれの活動の目的は植林そのものではなく、植林活動を通じた啓蒙活動による山村の活性化なのです。参加者に水源の森の大切さと素晴らしさを伝えて山村のファンを増やし、同時に水源の森を皆で守るという世論を醸成して水源税などを確保し、山村の活性化を目指すというものであります。山村が賑やかになってこそ水源の森は守られるのです。加えて荒川の水系のいたるところに百年の森づくりの活動の火をともし、重要な仕事です。荒川173kmの源流から東京湾にいた

百年ほど前に内村鑑三が指摘したとおり、植林は国家最優先の事業です。私はこの活動に携わるようになって年々その感を強くしています。申すまでもなく山が荒れば川も荒れ、海も荒れ、国土は全滅です。森林は島国であり山国である日本の国土の守護神です。上田知事が言われるように国土を守るのは自衛隊ではなく、山村の人々です。昔の林業家は崇高な自分たちの使命を自覚した誇り高い人々でした。それがいつの間にか、林業は割の合わない職業となり、山村は政治からも見放されてしまいました。それが証拠に先の選挙で林業の大切さを訴えた候補者は一人もおりませんでした。確かに票数から言えば山村は魅力の



ない栗田です。しかし水源の森の大切さを理解する人が増えれば、政治家もそして行政も山村に対する考えを改めるに違いありません。おそらく会員が10,000名を超えると動きが始まると思います。まだ700名です。年会費2,000円ですので皆さんにも会員になっていただいで1日も早く達成したいと思います

5. 若者たちへの夢の継承

ところで私たちの最大の課題は、いかにして我々の夢を若者に継承するかであります。2年前からその対策に力を入れてきた成果が少しずつ現れてきました。来年私の母校浦和高校は開校110周年の記念事業に浦高百年の森をつくることになりました。地元の寄居町にはここにおられる坂本全平さんの肝いりで協力ができ、この9月25日には浦高同窓会館で調印式を行うことになりました。全国の進学校ではおそらく初めてのことで、いずれマスコミでも報道されると思いますが、他の高校も追随するところが出るかもしれ

ません。同窓会員30,000名と1,200名の高校生が一体となって活動が始まれば当然寄居町の知名度もさらに上がり、町の活性化に繋がることは間違いありません。土地の所有者は荒れた山を浦高生が蘇らせてくれると喜んでくださいました。

また去る5月に行った中津川山吹沢の植林に秩父のカブスカウト22名が父兄同伴で、鳩ヶ谷市立八幡木中学校の科学部の生徒さん4名が顧問の先生を連れて参加してくれました。このような小中学生の集団参加は初めてです。そして先週行った下草刈りにも参加してくれたのです。カブスカウトは4人、八幡木中学校の場合は2人の先生と6名の生徒が参加してくれました。いままでこの活動に最も関係のあるはずの教育界からの参加は全く寂しく思っていました。が、秩父カブスカウト、八幡木中学校、浦和高校が動き出せば、小中高の参加者が一挙に増えそうな予感がいたします。現在埼玉大学にも百年の森づくりを始めるよう働きかけています。環境に造詣の

深い先生は5学部すべてにいらっしゃいます。経済学部は環境経済、環境会計、公共経済 教養学部は森林文化、地理、昆虫 理学部は生態系 工学部は環境制御 教育学部は環境教育、森林療法といった具合です。それに7,000人の学生がいます。カリキュラムの中に植林という社会貢献活動を加えることも可能でしょう。実現するかどうかは世論の高まりにあると思います。

さらに私が所属する東京損害保険代理業協会の動きです。荒川に大洪水が発生すると220万人の都民が被災するとする東京ハザードマップが防災も大切な代理店の仕事であることを教えてくれたのです。荒川の水源に木を植えて洪水を防ぐために「百年の森づくり」を支援しようと呼びかけた会員は123名。全体の18%です。強力な業界支援団体です。その協会に私は今「江戸前百年の森づくり」を提唱しています。防災の観点から損害保険会社、都庁、水産関係業者に都民を加え一大運動を展開したいと思うのです。

話は前に戻りますが小中学生が参加した5月の植林に3人の幼児と一緒に参加したご夫婦がいます。ご主人は市議会議員ですが、「私は植林が大好きで、将来身近なところで百年の森づくりを始めたいが、名前を使っていたいでしょうか」と聞かれたので「どんどんお使いください。私たちは会として応援することはできませんが、ご自分でおやりになるのはかまいません」。すると「私が参加する目的は会の運営を学ぶためです」。そこで私は「この様な活動を続けていけば国会議員も夢ではない」と持論をのべ励ましてあげたのです。

大きな善の循環が始まりました。一例をお話しましたように、活動の輪はどんどん広がってゆきます。どうか皆さん我々のような素人の力を活用して山村に賑わいを取り戻してください。そうすれば新しい林業の時代が始まると思っております。

ご静聴ありがとうございました。

和名倉の森づくりのこれから

百年の森づくりの会 副会長 高岡正彦

第14回和名倉の森づくりワークショップ

報告／5月28日～30日

仁田小屋の修復が完成した記念として、これまで行った植林地の観察をしながら、和名倉山頂まで登ることになりました。28日は金曜日でしたが、仕事を終えてから、また学生は講義を終えてから集まりましたので、仁田小屋に全員がそろったのは、夜の11時過ぎになってしまいました。翌朝六時四五分、仁田小屋を出発して、植林地「一步の森」「セカンドフォレスト」を観察しました。

昨年の観察では、植栽したほとんどのブナが活着しているようにみえました。今回観察してみると、2001、2002年に植樹したのもだいたい折れていました。昨年5月



仁田小屋横のミツデカエデの幹に取り付けた巣箱

24日、標高150mの仁田小屋尾根に植栽したブナの苗

(8年生24本)も枯れが目立つようでした。これは鹿による食害だけではないかもしれません。植栽方法や植栽時期などが問題だと考えられます。根をおおう藪をそのまま巻いたまま、植えることは標高の高い場所ではほとんど腐食を期待できませんので、根の張りを抑えてしまうことになりません。また、植栽時期については、通常樹木は、春が根から大量の水を吸い上げる時期ですが、春の植栽の際、その大切な根をどうしても傷つけてしまっています。秋から冬にかけてなら根の活動が休止期に入りまですので、秋に根巻きを丁寧に行って翌春または秋に植栽するのが望ましいということですが、当初からこのことは聞いていたのですが、メンバーのスケジュールの問題、ワークするための陽の長さのことから、これまでは植林活動は春に行っていました。それでも、活着しているように見えたのですが、しっかりと根付いていなかったようです。私たちのスケジュールで自然を守りきれないことがよくわかりました。次回の植林のために、東大演習林で分けていた

11月20～21日に計画しています。仁田小屋尾根ルートの標高1776～1780mは水場確保のため巻き道で登っています。今回は新たに尾根ルートを確認しようと藪を漕いで登りました。尾根ルートの方が足場はいいのです。次回ワークショップ(10月16日から17日)に、このルートを正式な作業道として整備したいと思っています。

途中のんびり雲取山などを眺めながら、十一時三十分山頂に着きました。和名倉山頂は360度原生林に囲まれていますので、展望はありません。この展望がないことを嘆く人が多いのですが、むしろこの苦むしたこの原生林に囲まれているのが、奥秩父の魅力ですし、和名倉山の魅力だと思っています。

和名倉から東仙波山、惣小屋谷のルートは、以前、山仕事のための作業道でしたが、林業の衰退とともに歩む人がいなくなり、廃道なっています。10年ほど前から川越工業高校山岳部OB会(KIAC)が整備を行っています。ですが、まだまだ藪が濃く、獣道が縦横に入り込んでいます。十分な危険なコースです。最近、インターネット上にこの山城の山行記録が掲載されていますが、KIACとしても、百年の森づくりの会としても、さらに大滝村としてもとても心配してい

ます。もともと和名倉山は遭難の多いところ。町から離れていますし、道は整備されてなく、不明瞭なところが多いからです。あまり、遭難事故として大きな報道にはなっていませんが、以前に私も、比較的ルートがはっきりしている二瀬尾根ルートで白骨体を発見したことがあります。いくつも行方不明の状態の遭難があると思われれます。安易な入山は控えるとともに、安易な入山の誘いも避けるべきだと考えています。当の私は、KIACのルート整備に参加し、これまでに2回周回しましたが、8から10時間ほどかかっています。今回、百年の森づくりの会のメンバーには、和名倉山の魅力をさらに深く知ってもらうために、KIAC元顧問の高橋先生に案内してもらい、周回コースで下山することにしました。

和名倉山から東仙波山までは、一時間半ほどの軽いアップダウンのある尾根道です。時折、樹林が透け、笠取山方面が望めます。左手に三角の「カンバアノ頭」が見えると、すぐに東仙波山です。東仙波山からは飛龍山が大きく見えます。荷物はかなり軽装でしたが、結構歩きましたので、今回は本格的な登山の初体験だった大学生はだいたい疲れていました。ただこの後は下りなので、慎重におりるだけです。がんばって

和名倉の森づくりのこれから

これまでに2度通過したのですが、私も疲れていたせいでしょうか、長々と続く藪のトンネルには、参りました。さらにまだ足場の崩れやすい箇所が数カ所あり、ようやく『鹿の楽園』(KTAC命名)に着くとへたり込んでしまいました。ここには直径1メートルを超えるブナ、トチノキ等が何本もあります。鹿だけでなく様々な動物が戯れる広々としたここは、まさに大きな森を支える緑のダムです。木々は根を大きく広げ山を支え、水源となる秘境の地ということですが、和名倉には、このような森があちこちにあったのだろうかと思われま

す。『鹿の楽園』以降も危険なところを通過します。ヒノキの植林地帯に入ると、大洞川に出合います。時刻も八時を過ぎており、29日朝仁田小屋に入った会員の三名が、心配して松葉沢出合いまで迎えにきてくれました。ありがとうございました。

まずはさらなる和名倉山の観察が必要だと感じています。第14回のワークで和名倉山とその周辺の奥深さや自然の豊かさを知ることができましたが、まだほんの入り口程度でしょう。沢の状態も観察したいと思っています。和名倉の森林の全体像を捉えていきたいと思っています。また、鹿をはじめとする動物たちの観察も必要でしょう。以前に一度、熊に出合ったことがあります。猿は林道沿いでよく見かけますが、相当数いるようです。大滝村の鳥であるコマドリなどの鳥類、昆虫、魚類などの観察も環境評価の生物指標として大切なことだと思えます。本来、観察は年間を通じて、昼夜を通じて必要でしょう。ボランティアメンバーでは無理もありますが、ポイントを決めて、観察を続け、場合によっては、固定カメラなどを設置して観察できるようにしたいと思っています。

埼玉県の高専学校山岳部による高専学校総合体育大会(5月)では、例年、川又から入山し、ヒルメシ尾根經由で、和名倉に登り、二瀬尾根經由で下山しています。ですから、このルートは多くの高校生がよく知っています。しかしくわしい自然観察には至っていません。せっかく和名倉山へ登るのでしたら、自然に造詣のある登山をしてほしいと思っています。そして「百年の森づくりの会」がこのような活動をサポートすることも、百年をこえる「森づくり」につながると考えています。

和名倉に「自然」を作るのではなく、和名倉の観察の機会を重視し、その自然に対して、援助するという立場が必要ではないかと思えます。『鹿の楽園』ができ上がったのはすべて自然の大きな力です。様々な要因が重なって、今に至っているのだと思えます。あの広々として高い森は、何十センチもの厚さに被われた落葉の堆積物に、源流の水を蓄え、極相林の美しい姿を見せています。

私たちは、観察と整備のための作業道の確保(限定的に)、荒廃斜面の土壌流出の防止、樹木の生長を促進するための植林や間伐などの森林整備、植林のための苗づくりなどの活動を進めていきたいと考えています。そのために、多くの人に理解し参加してもらいながら、一人でも多くの人に、活動を受け継いでいくためのシステムを作り上げていきたいと思っています。

最近、謙虚な気持ちで、じっくりやることが重要だと強く感じています。

第15回和名倉森づくりワークへのご案内

日時 10月15日(金)～17日(日)
作業 ①仁田小屋尾根作業道整備
②仁田小屋周辺の整備

参加ご希望の方は、10月12日までに事務局までご連絡ください。詳しい計画書をお送りします。



標高1800m付近のカラマツ林



荒れた和名倉頂上付近のシラビソ林



前方に東仙波「カンバノ頭」を望む



背丈を越えるスズタケの密生域を進む



美しい林相を見せる『鹿の楽園』



仁田小屋前にて

―水平面創造への挑戦―

グリーンベンチ工法

百年の森づくりの会 理事(大豊建設株勤務)

東 克明

日本は造山活動が活発で、地形・地質的には不安定で複雑な条件下にある。弧状列島で、河川は3,000m内外の背梁山脈から太平洋・日本海へ一気に流れ落ちる。降雨・降雪量の多さは、流水による山地の浸食をより活発なものにし、V字谷が網状に発達し独特の渓谷美をつくっている。雨は同時に斜面崩壊を引き起こし、山腹の崩壊地形は山歩きの稜線から或いはアプローチの林道から垣間見ることとなる。

岩の割れ目に進入した水の凍結融解や木の根の伸長、化学作用などにより岩盤が岩屑となる風化や流水による浸食は自然の営みで、地殻変動等と共に地球の輪廻ともいえ、人の力でその全てを防ぎ得るものではない。しかし山腹の崩壊は、植生の有無や樹木の伐採等にも影響されている。斜面崩壊の進行を防止し植樹を容易にする画期的工法として、グリーンベンチ工法をここで紹介する。

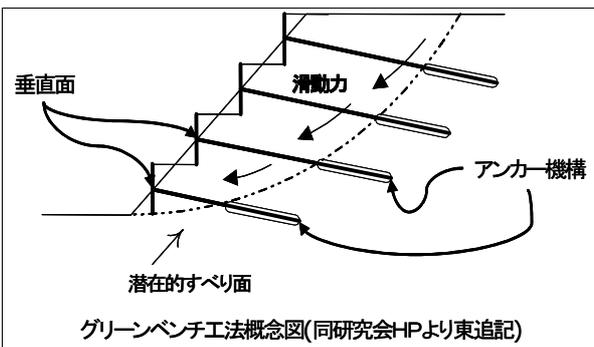
グリーンベンチ工法は、当会会員でもある栗原

光二氏が斜面崩壊を防止し緑化を図る目的で考案した工法。簡単に言うと、急な斜面を幅の狭い棚田のような水平面の階段に変える方法で、この階段平面は植生緑化の促進に役立つとされる。

グリーンベンチは垂直面とその垂直面が倒れないように背面で引つ張るアンカー機構から成っている。垂直面は水は通すが土砂は通過しない材料の組み合わせが考えられている。

垂直前面の材料は景観にも配慮。アンカー機構は現地の状況に応じて、鋼棒を岩盤に固定したり、土砂の自重を利用する鉄板を用いたりする。

裸地の斜面と比べ階段平面は表土の流出が起きにくい。さらに、グリーンベンチの階段は各々が崩れようとする力(滑動力)に抵抗する(アンカー機構)。斜面はのり面或いはのり(法)とも呼び、のり面の



下の部分をのり先というが、山地のガレ場が雨で崩れ始めるとき、のり先から滑り始めることが多い。表層雪崩が上部から滑り始めるのとは少しイメージが違う。グリーンベンチの最下段の階段がこの滑り始めに対抗し、次の階段もその場で滑り始めに対抗することになる。

降雨と斜面崩壊の関係を簡単に説明する。空のプールに立って他人に押される自分を想像して下さい。降雨量の増加でのり先では地下水位が急激に上昇、プールに水が入り始めついに首まで水面が上がったとします、これでは押す力に抵抗しなくとも体が軽くなって抵抗しにくくなります(抵抗力の減少)、押す側の人は滑り台に何人もい

て着ぶくれした格好で体重をかけているとします。雨が降り、滑り台に水が流れてくると、濡れた服で見かけの体重が重くなりあなたに寄りかかる力も増す(滑動力の増加)。このとき、プールのはしから投げ入れたロープを掴んだとすると、ロープが切れたり腕力が続く限り押される力に對抗できる。

植林活動へのグリーンベンチ工法の果たす役割を次に述べる。グリーンベンチ工法は階段状の水平面を作るので、表土や細粒分の土壌を流出させず、雨水を地中に涵養し、植生の生育条件を好転させる。同時に苗を植え、下草を刈る作業を容易にする効果もある。さらに、その地にある在来種の種は斜面と違い流れにくく、自然植生の成長も期待できる。

当然、グリーンベンチ工法の垂直面とアンカー機構は人為的な物でいつかは朽ち果てる。

グリーンベンチ工法は斜面が森になるまでの手助けをする補助工法である。この工法が2003年度グッドデザイン金賞受賞時の審査委員の評価で、この点について「・・・棚田状の樹木を植林することによって自然再生を計っている。金網や間伐材(垂直面の材料)は、仮設的な役割を果たし、長期的には植林した樹木によって安定した斜面を形成する。技術的手法もさることながら、土

木造成に対する自然再生の考え方、取り組みを高く評価したい」と述べている。

グリーンベンチ工法を当会の植林作業へ応用する場合を考えてみたい。グリーンベンチ研究会では特に森林育成のグリーンベンチをフォレストベンチと名付けているが、栗原氏は、山地のガレ場等を想定しさらに改良を加えようとしている。

一つは、材料の軽量化と作業の簡便化で、人力で運べる材料と道具さらに訓練された素人でも可能な作業方法の研究であり。二つめは、その場にある間伐材や枝等、自然材料の有効利用で、これは人力運搬の軽減にもつながる。山地のガレ場(崖錐と呼ぶ)の崖錐層の厚さは幅があるが、1m前後の場合鉛直面の支柱を崖錐の下の堅い地盤に差し込むエクセルポルトという人力で打ち込める工夫も考案されている。

グリーンベンチ工法は伐採後の根も残り、下草も生えている斜面に適用するものではないので、百年の森づくりの会が現在取り組んでいる中津川、和名倉の植林作業に応用できるわけではない。しかし、自らの力で再生できない崖錐や拡大する崩壊斜面こそ、森づくりが求められている。

森林の保水調整能力は樹木ではなく、土壌が担っている。樹木はその根を張り巡らし基盤岩の割れ目に食い込み、落ち葉で地表面を覆うこと

で、この土壌の流出を防止する。植生と斜面崩壊の関係では、①林歴20年を境にして崩壊率が3〜6倍低下する。②20年以下では広葉樹林に比べ針葉樹林の崩壊率が高い。③根は残るが伐採により根系の補強効果(抵抗する力)は低下するといわれている(この部分「土と基礎」No548、大塚他)。

現在、当会にはグリーンベンチ工法に適した植林地が与えられているわけではないが、「森は土壌を守り、土壌は水を制御し、土壌は森を育む」将来の活動として、裸の斜面での森づくりを提唱したい。その一環として、仁田小屋下部の斜面への試験的な適用を2005年度のワークに組み込むことを提案する。

本文は栗原氏のお話、同氏からの提供資料、グリーンベンチ研究会のホームページ(<http://www.greenbench.net>)を参考としたが、内容はすべて私の責に属する。

大滝村強石

吉田泰邦さん

▲▲ 山を守るこころ

県立図書館で時折り目している大滝村の広報誌「おおたき」の二月号に掲載された短歌

何時の日か 銘木となるを 夢に見て

遠嶺吹雪く 今日も枝打つ

大滝村強石（こわいし）の吉田泰邦さんの作である。枝打ちは冬場の厳しい作業である。雪中、高い幹に取り付いてひたすら枝打ちをする姿に、山を守り続けてきた人の心を写すようで、どのような方なのかお目にかかりたく思っていた。7月の下刈り作業のための下見の帰りに思い切ってお訪ねした。



枝打ちの施されたスギの林

吉田泰邦さんは、突然の訪問にもかかわらず快く迎えてくださり、歌にたがわぬ誠実なお人柄でいろいろなお話をしてくださった。また、光岩小学校の裏手の林道をのぼ

り、よく手入れの施された山林を見せてくださった。

住宅建築工法の変化や外国産木材による集成材の普及により、これまで無垢材を主流としてきた国産材の需要は減少し、国産原木価格は大幅に値下がりしているといわれている。4年前の四国のある森林組合の試算では、林道から300mはなれた45年生のスギを伐り出し、トラックで原木市場まで運ぶと、市場手数料をふくめ一本あたり3628円の経費がかかる。市場価格がこれを下回る現状では、山を所有している林家には、大きな負担だけが残る、そこには「山持ち貧乏」と陰口がささやかれるような重い現実がある。山林面積10ヘクタール以上の山持ちを「林家」と定義しているが、少し古い統計では、1990年の埼玉の山林の所有規模では5ヘクタール未満が、全体の93%を占めている。吉田さんや前号で紹介した山中敬久さんのように、大滝の林家の方達は、埼玉の林業にとつては大切な位置におられるのではないだろうか。また林業にたずさわる従事者では、1965年に2125人、30年後の1995年には661人と減少し、高齢化も進んでいる。更に、埼玉県の木材需要に対する県産材の需給率では、平成10年の需要24万3千立方メートルに対して、供給された県産材は、3万1千立方メートルと約8分の1である。経営としても産業としても林業を考えることが非常に困難な時代が続いてきたと言える。森林の持つ多面的な機能が見直されつつあるが、人の一生より長い年月にわたり守られてきた森林の価値を市場での木材の材価だけで補うことには無理がある。

吉田さんによれば、山のよかつた昭和30年代、初任給が8000円のころ、山の木を二本も売れば、それに相当する金額が手に入ったという。ところが今は、林道脇の60年生のスギでも、一本数百円で引き取られるくらいで、すこしでも集材作業の必要な林道から奥の木だと、手間をかけてまで引き取らないという。そのような場所では、間伐しても山で腐らせるしかないという。自家用に伐りだした林道脇の90年生のヒノキでさえ、伐り出し、搬送し、製材まですると材価はないに等しかったとのこと。スギ材では、まるで山の木に千円札を一枚を貼り付けて出すようなもので、とても経営としては成り立たないのがある。ここ4、5年は特にそうだという。今年は特に40数年山をやつてきて一番ひどいのではないかとという人さえいるという。昔、「山持ちは金持ち」という時代もあったが、今や「山持ち貧乏」である。そうおっしゃる吉田さんであるが、山の手入れだけは怠らない。まだ若いヒノキの林分に枝打ちを3回施し、将来は無節の材に仕立てるといふ。数十ヘクタールある山は、よく手入れがなされ、飯能にある吾野木材市場にもよく出かけられて、材価の動向を見ているという。同じ材でも、無節とそうでないのでは大きく違うため、山の手入れがどうしても必要なのである。曲がりや節のない材を育て上げるために、どれほど多くの年月と苦心を重ねてこられたのだろうか。木を慈しむように育てる吉田さんの歌に込められた思いに、大滝の山をささえてきた芯の強い確かなものを見せていただく思いがした。



「浦高百年の森づくり」スタート

—2004. 9. 9 上田県知事訪問—
浦和高校同窓会



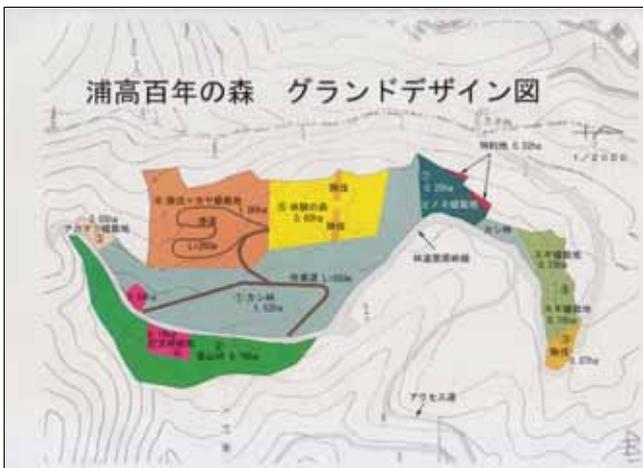
2005年に学校創設110周年を迎える浦和高校同窓会(川本宜彦会長)は、記念事業として「浦高百年の森づくり」の事業をスタートさせた。寄居町風布地区の民有林約5ヘクタールを借り受け、100年をかけて森づくりに取り組むものである。

長い伝統をもつ同校は、この事業において「環境」という新しい伝統を付け加えることを主旨としてかかげ、埼玉の母なる川「荒川」上流の森を再生して国土と環境の保全を図ることを目的としている。9月9日には、埼玉県知事を訪問して、事業のスタートを報告し、25日には地元地権者との土地賃貸契約書を取り交わす。

森林施行計画では、現在多くが耕作放棄地となっている同地を9つの地区に分け、それぞれの地区に適した森林に誘導する。1. カシ林、2. コナラ、クリ、ヤマザクラを中心とした里山林、3. 林道法(のり)面など土壌が余りよくない場所ではアカマツ林、4. カヤやモミを主体としたカヤ林、5. 林業体験が実施できる「体験の森」、また生産林としてのヒノキ林やスギ林などである。100年という長期の視点から、このように継続的な森づくりが取り組まれることの意義はきわめて大きく、しかも教育という場で続けられることの意義と可能性は大きい。

森林整備にあたっては、地元寄居町の森林組合の協力をえながら進められる予定で、地域の活性化に深く結びつくことも、この事業の大きな目的としている。

これまで見捨てられがちであった森林が、このように意識的な取組みで再生され、永続的に森づくりが進められていくなら、日本の環境や文化は、大きな可能性と創造性をともないながら、変わっていくのではないだろうか。一つ一つの地域が多くの人々の責任のある関わり方で守られていくような活動が、浦高同窓会の活動をはじめとして、県内いたるところで生まれ進められることが望まれている。上田知事が提唱される「環境日本一」も大きく前進するのではないだろうか。



第5回荒川流域環境シンポジウム

—2004. 7. 31~8. 1 大滝村中津川—
共催:NPO法人 荒川クリーンエイド・フォーラム

荒川のクリーンアップを通じて川と親しみ、市民の環境保全の意識を高める活動をしている「NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム」共催の第5回水環境シンポジウムが、「源流域の自然と山村の再生に向けて」をメインテーマに行われた。

1日目は大山沢の溪畔林であるシオジの原生林と鉄砲堰の見学研修が行われた。案内は彩の国ふれあいの森友の会理事で森林インストラクターの永越信樹氏と民宿中津屋・大滝村村議会議員の山中進氏である。

鉄砲堰は台風後で水量が多く、迫力ある「実演」が見られた。しかしこの豪雨のため源流への登山道が土砂で埋まり、シオジの原生林見学はできなかったが、両案内人から付近の溪畔林のほか、源流・中津川地域の歴史的・文化的な遺産や経験を解説していただき、木材生産・林業と山村の生活などの様子を知ることができた。

2日目は森林科学館学習室で、シンポジウムが行われた。基調講演として、まず森林生態学者で埼玉県農林総合研究センターの崎尾均氏から「溪畔林の機能と生物多様性」について。崎尾氏は、全国溪畔林研究会の代表でもあり、溪畔林の生態系を論理的に研究している立場から、渓谷が浸食され崩壊して樹林に空間が開けると、シオジやサワグルミ、カツラなどがどのように溪畔林を再生していくかをわかりやすく説明し、それを山林の管理や河川工事に生かして行くべきであると解説していただいた。

次に、多摩川源流研究所所長の中村文明氏から「山村の活性化に向けて」の講演。中村氏は多摩川源流の自然に惹かれて探検を続け、源流絵地図を作り上げた。それを知った小菅村が中村氏を招き、「多摩川源流研究所」を開設。源流を生かした村おこしを進めている。

中村氏は、源流域の再生のために、まずその持つ自然・文化を調査・研究してその情報をわかりやすく発信することが、活動や交流を促進するにあたり必要であることを述べられた。研究所では美しい写真を入れた会報「源流の四季」を流域の自治体と小中学校に配布し、次第に影響が広がっているとのこと。

最後に「源流域の自然と山村の再生」をテーマにパネルディスカッションが、上記の2講師ほか、秩父森林バイオマス研究会の吉田廣文氏、NPO法人秩父の環境を考える会の齊藤英次氏、林野庁埼玉森林管理事務所所長の太越良一氏、荒川上流河川事務所副所長の箕浦宏和氏が加わり、コーディネーター・NPO法人荒川流域ネットワーク代表の恵小百合氏で行われた。

討議の結果「源流域の自然と山村の再生」をしていくためには、流域全体が関わらなくてはならないため、その理念的キャッチフレーズとして「生き物、特に魚類が往き来できる源流から海までつながる一本の河川の再生」をシンポジウムのまとめとした。



平成16年度上期の活動結果

○上田県知事より表彰

4月29日、上田県知事より森づくりの貢献を認めら、内藤会長が表彰されました。

○中津川山吹沢第2回植林活動実施

5月22日(土)～23日(日)に大滝村中津川山吹沢県有林において第2回の植林を実施しました。当日は、秩父のボーイスカウト21名を含む、99名が参加し、ブナ、オオヤマザクラ、カツラ、ヒノキの206本を植栽しました。今後も、継続して、広く県民に開かれた森として整備していきますので、ご協力をお願いいたします。(詳細本文)

○第14回百年の森づくりワーク実施

5月28日(金)～30日(日)に、第14回和名倉山百年の森づくりワークを実施しました。今回は、埼玉大学WV部現部も多く参加し、総勢21名が参加しました。今回は、仁田小屋の改修工事が終わりましたので、今まで植林した現場の調査と和名倉山山頂への登山を実施しました。また、和名倉山東仙波ルート調査も合わせて実施しました。なお、仁田小屋の外側に一部未了になっていたシーリング補充などの整備を

施しました。(詳細本文)

○平成16年第4回通常総会、特別上映会を開催

6月13日(日)午後2時から大宮ソニックシティ6階601会議室において、75名の出席のもと通常総会を開催しました。平成15年度事業報告、収支決算および平成16年度事業計画、収支予算案、役員改選について、原案通り承認いただきました。その後、当会の活動をずっと記録に残して下さっております、伊藤弥八さんによる、特別上映会が行われ、参加者のかたがたは深い感銘を受けました。当日は、75名が出席して、懇親会も和気藹々のうちに終了することができました。

○「荒川源流森づくり体験」中津川、大血川植林地地下草刈り実施

7月24日(土)～25日(日)に植林を行っている、中津川山吹沢、ならびに大血川大陽寺の植林地の地下草刈りを実施しました。総勢77名の方々が参加くださり、2日間に亘り、大変猛暑のなか実施し、無事終了することができました。これからは暫くは地下草刈り作業を継続しますのでご協力をお願いします。

平成16年度これからの活動について

○第15回百年の森づくりワークの実施

10月15日(金)～17日(日)に第15回和名倉山百年の森づくりワークを実施します。今回は、次回の植林地の整備(作業道の整備を含む)と仁田小屋の周辺整備の活動をする予定です。参加ご希望の方は、急ぎで恐縮ですが、10月12日(火)までに、事務局までご連絡ください。

○百年の森交流会開催

日時 10月30日(土) 13:00～16:00

場所 埼玉大学内 百年の森テラス
〒338-8570 さいたま市緑区下大久保255

交通 J R京浜東北線北浦和駅下車 埼玉大学行き 20分

J R埼京線南与野駅 下車 埼玉大学行 10分

恒例の百年の森交流会を開催します。当日は簡単な食事と飲み物を用意してお待ちしております。また、当会の活動についても紹介しております。お気軽にご参加ください。

○和名倉山仁田小屋情報交流会

11月20日(土)～21日(日)に和名倉山仁田小屋において今年度の小屋を閉じるため、常務理事会を兼ねて、会員皆さんとの情報交流会を開催します。当日は、和名倉山の今後の展望について話し合いを持ちたいと思います。多くのご参加をお願いします。

■現会員 (会員番号 氏名 住所)2004.3.16～2004.9.15入会者

685 栗原 光二 熊谷市/686 都築 康男 桶川市/687 秋田 英一 狛江市/688 福島 明 皆野町/689 松村 雄 鴻巣市/690 北村 孝子 吹上町/691 平松 廣 坂戸市/692 野辺 博 さいたま市/693 増井 元宣 熊谷市/694 増井 美恵子 熊谷市/695 猪島 秀俊 鴻巣市/696 小林 邦雄 熊谷市/697 関根 津智子 所沢市/698 田隅 三生 港区/699 寿永 一郎 茨城県利根町/700 坂本 進 さいたま市/701 毛利 東義 さいたま市/702 島村 幸佑 春日部市/703 細田 陽子 上尾市/704 小島 章男 小鹿野町/705 根本 勝代 久喜市/706 馬場崎 稔子 さいたま市/707 東洋パーツ(株) 長瀬町/708 榎本 泰助 さいたま市/709 引間 勝俊 上尾市/710 吉田 兼紀 小平市/711 野村 正義 牛久市/712 丸橋 達雄 深谷市/713 菅野 昇孝 白岡町/

714 共和防災建設(株) 山形市/715 小山 茂 さいたま市/716 坂本 晋一朗 吉田町/717 波多野 匡弘 上尾市/718 大藪保険コンサルタント 杉並区/719 坂本 栄治朗 吉田町/720 忠 祐次 北本市/721 野口 皖永 秩父市/722 田口 力也 横浜市/723 黒澤 伸二郎 皆野町/724 別所 悦子 北本市

※前号会報に掲載した会員名簿のお名前・ご住所に誤記がありましたので、訂正お詫びいたします。

- ・635 大澤 芳夫 皆野町⇒長瀬町
- ・637 出牛 洋行 皆野町⇒長瀬町
- ・638 出牛 悦子 皆野町⇒長瀬町
- ・639 四万田 和男⇒四方田 和男



伊藤弥八 映像作品『プロジェクト - 和名倉山 -百年の森』ができました。

平成13年3月から16年5月までの当会の活動のあゆみを映像作品としてまとめていただきました。和名倉の調査行や第1回のブナの植林、子供たちをまじえた山吹沢での植林活動が感動的に納められています。ビデオを用意しております。無料でお貸ししておりますので、ご希望の方は事務局までお申し出ください。

和名倉百年の森 第8号 2004年9月30日発行

発行 百年の森づくりの会 会長内藤勝久
編集 百年の森づくりの会 広報委員会

百年の森づくりの会 事務局

〒336-0015 さいたま市南区太田窪2034-1 TEL 048-885-6697/FAX 048-882-0245/E-mail naitoh@saitama-j.or.jp